

# 青森・岩手日帰り旅 2024



2024年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

旅友たちと JR 東日本の 1 日乗り放題の期間限定切符を使って、日帰りで青森県と岩手県を回る鉄道旅をしてきた。乗り鉄、呑み鉄だけでなく打ち上げも充実した旅になった。

## ■今回の旅は

今回の旅は、「JR 東日本たびキュンパス」発売から始まった。この切符（通称キュンパス）は 1 カ月間限定で JR 東日本全域を新幹線も含めた 1 日乗り放題切符で、座席指定も 2 回までできる。JR 以外に青い森鉄道や三陸鉄道などにも乗ることができるという優れものになっている。

このことを私の旅友で酒の師でもある“師匠”に話したら、即座に日程と旅行ルートが決まった。それに女性旅友のチーちゃんと彼女の旅友のキョーちゃんも加わった。もちろん彼女たちも旅と酒が大好きだ。

行程は 1 日乗り放題を最大限に活かし、東京駅から東北新幹線の始発に乗り、青森から太平洋側に出て三陸鉄道を南下して宮古から盛岡に入り、盛岡で打ち上げをして最終の新幹線で戻ることにした。

当初はこんな行程で回るのは私たちだけだろうと思っていたが、行ってみたら考えることは一緒だった。



【ルート 赤は新幹線、青は在来線】

## ■考えることは一緒

東京発の朝一番の東北新幹線はやぶさ 1 号は全席指定で満席になっている。私たちは師匠が頑張って指定を取ってくれたが、取れなかった乗客は立席特急券を購入してデッキに立っている。そのデッキも満席になっている。いや、デッキには席がないから満席はおかしいか。

周囲を見渡すと私たちのような中高年以外に若者も多く乗っている。隣に座った若者に訊ねると、彼は大学生で春休みを利用してキャンプで来たと言う。彼の旅のプランは盛岡で降りて平泉を中心に回って回る計画だと言う。私は「平泉は面白いよ、世界遺産もあって、源義経伝説の終わりで始まりの地だよ」と話す。彼は「義経ですか、良いですね」と応えてくれる。

上野駅を過ぎて、私たちは“プシュ”と缶ビールを開けて車内早朝宴会を始める。こんな朝から飲んでいるのは私たちだけかと思いきや、そんなことはない。どこもかしこもプシュの音が聞こえるから考えることもやることも一緒のようだ。

隣の若者は盛岡駅で降りたが、デッキにいた乗客が直ぐ座ってきて満席状態は変わらない。

新青森駅で私たちを含め大多数の乗客が降りると、自動改札機は長蛇の列になっている。たまりかねた駅員が「キャンプのお客様はこちらから通過してください」と言って団体客用の柵を開けて対応している。

新青森で乗客は青森方面と弘前方面に分かれ、青森駅でも下車するので乗客は徐々に減ってくる。それでも2両編成の列車は満席で、驚いているのは通勤通学の地元の人たちだろう。

#### ■青森は雪

青森駅は雪が降っており、北国の旅情を演出してくれている。青森ベイブリッジがあり、その先には青函連絡船の八甲田丸がある。青函トンネル開業は1988年だから40年以上も船は係留されている。



【青森駅】



【青い森鉄道】

青い森鉄道の列車に乗り込み、青森駅で買い込んだビールで乾杯して雪の青森を車窓から眺めながら列車は進んで行く。人々は雪の中を寒そうに歩いている。

陸奥湾、夏泊半島を過ぎて野辺地を通過する。同行メンバーたちにもゆとりが出てきて、アルコールの効果で口もなめらかになっている。これが鉄道旅の醍醐味と言うものなのか、実に心地よい空気が流れている。

初対面のキョーちゃんと話す。旅も酒も大好きという彼女は東京の真ん中に住んでおり、銀座は彼女の散歩コースという。それゆえこういう田舎を旅するのが好きになったのだろう。それにしても東京の真ん中とは、交通の便や買い物、グルメ、芸術鑑賞に便利で羨ましい限りだ。

## ■三陸鉄道

青森駅の乗り換え時間は長かったが、その他の乗り換え時間は短い。中でも三陸鉄道の久慈駅での乗り換え時間は6分間しかない。ホームからホームへの乗り換えをすれば問題ないが、ホームにはビールを売っておらず、ビールを買うためには一旦駅の外へ出なければならない。

ここでビールを調達しないとイケないと師匠が意気込んでいる。師匠は「私にお任せを」と言っておき、猛ダッシュして1人で駅の外に向かう。私たちも三陸鉄道の座席確保のために走る。

席は確保できた。それもレトロ風の高級感あふれる列車で、なんと4人掛けのボックス席の中央に大きなテーブルがあり天板の下に緑色のテーブルクロスが掛かっている、その裾は足元まで伸びている。完全に“こたつ”を意識したもので暖かい。冬ならではのサービスらしい。

発車時刻が近づいてくるが、師匠はまだ来ない。チーちゃんは心配してドアのところに行き、最悪の場合は列車を止める気らしい。彼女をそこまでさせるのはやはりビールへの執念か。

発車のベルが鳴る。チーちゃんは列車を止める準備に入っている。そしてベルが鳴り終える直前で師匠が滑り込んできた。すかさずチーちゃんは師匠からビールを受け取る。師匠のことよりビールを心配していたのか。

チーちゃんは満面の笑みを浮かべ、その後ろから師匠が疲れた顔で席にやって来る。師匠は「売店の店員が電話していて、なかなか買えなかったよ」と言っている。勤務時間中の電話とは、いかにも田舎の駅の光景が浮かんでしまう。

師匠が買ってきたビールはバルト3国のリトアニアのビールで、550円もしたと言っている。確かに高いが、この“こたつ風列車”の中で冷えたビールが飲めるのは何とありがたいことか。

それにしてもなぜリトアニアなのかとスマホで調べると、久慈市はリトアニアのクライペダ市と姉妹都市になっている。



【三陸鉄道のこたつ風レトロ列車の車内 大きな中央のテーブルにはリトアニアのビール】

ビールが実に美味しい。車窓の雪景色を見ながらこたつ風列車で飲むリトアニアのビールは格別だ。おっと師匠の献身的行動、ビールに対する執念にも乾杯だ。

三陸鉄道は 2013 年 NHK の朝の連ドラ「あまちゃん」の舞台で実際に撮影に使われた。

堀内（ほりない）駅は、ドラマでは「袖が浜駅」という駅名で頻繁に登場していた。その袖が浜駅の表示板がホームに残っている。

橋梁では列車の速度を落としてくれる。大沢橋梁の背後には国道 45 号線の赤い立派な橋が架かっている。高さ 33m の安家川橋梁も三陸鉄道の名物橋梁なのでゆっくり進んでくれる。

尚、三陸全般の詳細は旅行記「三陸の旅 2021」に書かれている。



【堀内駅の袖が浜の看板（チーちゃん撮影）】

#### ■盛岡のタクシー

その後も鉄道旅は続くが、打ち上げに盛岡の料理店を予約しており、そのため宮古駅以降はアルコールを控えることになる。

盛岡駅に到着する。予約してある店は繁華街の中心部にあり、歩くと 15 分位だが、気温はマイナス 2℃、既に暗くなっており、私たちは駅で客待ちしているタクシーに乗り込む。

助手席に座った私は運転手に店名と住所を伝えるが、運転手はキョトンとしている。もう一度伝えると運転手は「行き方がわかりません、この車にはカーナビが付いていないから、お客様のスマホに住所を入れてガイドしてよ」と岩手弁で返ってくる。

私は「えー、何それ！」と返答するものの、運転手は「お願いしますよ、会社がカーナビを買ってくれないので困っていますよ」とトンチンカンなことを言っている。

私よりも高齢で素朴な岩手弁で頼まれ、今さら降りる訳にもいかず、この前代未聞の運転手の要請に応じて助手席に座る私がスマホでナビをして出発する。後ろの 3 人も各々自分のスマホに目的地を入力しているから車内はナビのオンパレードになっている。乗ること、いやナビすること約 10 分、店に到着する。

私は料金メーターの表示どおりの 800 円を支払う。ナビ代の値引きはなかった。

#### ■絶賛のジンギスカン鍋

店はジンギスカン鍋の店「羊屋えびす盛岡店」で、ジャケットを着た店長が出迎えてくれる。この店は盛岡に住む私の友人の行きつけでその友人が予約してくれた。

店長は「植木様ですね、お持ちしておりました」と言ってテーブルに案内してくれる。20 人も入れればいっぱいになる店内には、私たち以外にもう一組お客がいるだけで、意外に空いている。

友人のお勧めは“スーパーレアで食べるラムヒレ肉”と“ミディアムで食べるラム生肩ロース肉”、もちろん生ビールも注文する。出て来た肉は薄切りではなくステーキのようで分厚い。

まず、店長からスーパーレアの焼き方を教えてもらう。一般的にはジンギスカン鍋は鉄板の上に野菜を敷いてその上に肉を乗せ、蒸し焼きにするが、ここでは鉄板に直接肉を乗せ蒸し焼きにしない。スーパーレアなので赤い部分がなくなれば良いとのことで、店長が教えてくれた通りに肉を焼き、そしてタレに漬けて口に入れる。

ラム肉特有の臭みはない。そもそもヒレ肉は柔らかく、さらにスーパーレアなので経験したことがない食感で実に柔らかい。もちろん味付けも良い。私は北海道で多くのジンギスカン料理を食べているが、これはちょっと違う。

他のメンバーも異口同音に「何これ、これがジンギスカン？信じられない！」と絶賛のオンパレードだ。

ミディアムで焼いたラム生肩ロース肉も旨い。ヒレ肉ほどでもないが十分に柔らかい。肉の鮮度がいいからだろう、

北海道と言えばベルのタレが定番だが、この店のタレはベルではなく、もう少しコクがあるが薄口を感じる。味変で辛味を入れるとビールにさらに合う。そして最後の味変で酢をいれるとこれがまたいける。事前に友人からこの店のタレは最後に酢を少し入れて完成すると聞いていたが、まさしくその通りだ。

これで完成と思いきや、最後に店長がカツオと昆布の出し汁を持ってきて、各自使った焼肉タレにスープを加える。それは蕎麦を食べたつけ汁に蕎麦湯を入れるようなもので、実にいい味になっている。



【ラム肩ロース肉】



【参加メンバーたちと打ち上げ】

私たちは大満足で店を出る。気温は氷点下だが、気持ちと胃袋は最高潮で、むしろ冷たい風が気持ちよく感じる。食の満足感は人間の気持ちや体調に多大な影響を及ぼすこと実感する。

盛岡駅まではタクシーを拾わず歩くことにする。せっかくだからいい気持ちなので、再びナビをしたくないのは暗黙の了解事項だろう。

#### ■ジンギスカン（成吉思汗）の秘密

盛岡とジンギスカン鍋という不思議な組み合わせだが、ジンギスカン鍋の発祥の地を主張しているのが盛岡からも近い岩手県遠野市、他にも山形県蔵王温泉、長野市信州新町などある。

普通に考えれば羊の肉を鉄板で焼くだけの料理は誰でも考えられるので、全国至るところにその起源があっても不思議ではない。おそらくジンギスカン鍋という名前が全国的に有名になってから、羊の肉を鉄板で焼く料理は自分たちの土地でも古くからあったというのが各地の主張なのだろう。

調べてみると、記録が残っているジンギスカン鍋の発祥の地は東京らしい。1936年（昭和11年）にジンギスカン料理専門店「成吉思荘」が開店した。そして同じ年に札幌の「横綱」という店にもジンギスカン鍋のメニューが登場している。

問題はジンギスカンという名前で、命名については諸説ある。

私は数カ月前にモンゴルを旅してきた。羊の肉はモンゴルでは最もポピュラーで、そしてジンギスカンは大モンゴル帝国を創った始祖で地元では大英雄だから、羊＝モンゴル＝ジンギスカンは即座に繋がる。

現在ならば私も含め多くの人々はそのことを知っているのだから羊の肉からジンギスカンは簡単に思い浮かぶが、昭和初期ではそんな人は稀有だろう。しかし当時それを充分理解していた人物がいた。それが駒井徳三で、彼は1932年（昭和7年）の満州国建国に深く関わっていた。それゆえ駒井徳三命名説はかなり信頼できそうな気がする。

彼が命名した理由は、平泉で亡くなったはずの源義経が実は生き延びて北海道からモンゴルに渡ってジンギスカンになった伝説に由来する。駒井徳三は日本希代の英雄の源義経がモンゴルの英雄ジンギスカンになっていれば、日本と満州さらにモンゴルまで含めて人々が一体化できると思ったからだろう。

余談だが、私は友人から「成吉思汗の秘密」という本を勧められ、凄い勢いで読み終えて感動した。それは小説だが、源義経とジンギスカンが同一人物であることを裏付ける検証を行うもので、矛盾点を無くし、まるで歴史の真実かのごとく描かれている。

この小説は歴史小説の傑作と評されており、お勧めの一冊だ。

遠野も盛岡も平泉の北の方向にあり、源義経＝ジンギスカンが前提ならば北海道に渡る前に立ち寄っても不思議ではない。その時に羊の肉を焼いて食べて何か決意したのかもしれない。

私がもしもまた盛岡のあの店に行ったら、私は店長にこう伝えたい。「源義経が逃亡途中この地に立ち寄って羊のヒレ肉をレアで焼いて食べて元気百倍になり、一大発起した結果、大モンゴル帝国を築いた」と。そしていずれ盛岡が“元祖ジンギスカン鍋発祥の地”になるかもしれない。

観光名所にはそのような“言ったもの勝ち”が多い。例えば、壺井栄の小説「二十四の瞳」には小豆島という文言は一切出てこないが、小豆島が真っ先に小説の舞台は小豆島だと主張した。尾崎紅葉の小説「金色夜叉」も貫一お宮の熱海の海岸の別れのシーンには松の木のことなど全く書かれていないが、それらしき松が「お宮の松」として熱海海岸の名所になっている。

## ■旅の記録

実施は2024年3月7日（木）に日帰り旅行をしてきた。行程は以下に記す。

横浜	05:53-06:19	東京	(JR 東海道線 4 駅 28.8km 483 円)
東京	06:32-09:49	新青森	(東北新幹線はやぶさ 1 号 9 駅 713.7km 17670 円)
新青森	09:58-10:04	青森	(JR 奥羽本線 1 駅 3.9km 189 円)
青森	10:46-12:19	八戸	(青い森鉄道 20 駅 96.0km 2320 円)
八戸	12:24-14:09	久慈	(JR 八戸線 23 駅 64.9km 1240 円)
久慈	14:15-15:49	宮古	(三陸鉄道 17 駅 71.0km 1890 円)
宮古	15:54-18:21	盛岡	(JR 山田線 14 駅 102.1km 1980 円)
盛岡	20:50-23:04	東京	(新幹線はやぶさ 48 号 4 駅 535.3km 15010 円)
東京	23:22-23:54	横浜	(JR 東海道線 4 駅 28.8km 483 円)

合計の距離は 1644.5km、個別に切符を買った場合 41265 円になるので、3 万円以上もお得な旅をした。

朝食は各自調達して新幹線内で食べ、昼食は青森駅で購入し車内で食べた。夕食は盛岡市内の「羊屋えびす盛岡店」でジンギスカン鍋を食べた。

1 人当りの費用は約 1 万 7 千円になった。

内訳はキュンパスが 10000 円、ジンギスカン鍋の夕食（飲み物含む）が約 4000 円、その他の昼食、ビール、タクシー代など 1 人当り約 3000 円になった。